

## 書評01

日本農業新聞編

### 『協同組合の源流と未来 相互扶助の精神を継ぐ』

岩波書店 / 2017 年 6 月刊 / 224 ページ / 1800 円 + 税  
ISBN 978-4-0006-1204-3

評者：松原 拓也

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 研究開発第 2 部 研究員



2014 年に国の規制改革会議よりいわゆる「農協改革」に関する提言がなされ、2016 年 4 月には改正農協法が施行されるなど、昨今の農協の置かれる立場、取り巻く環境の変化は著しい。法改正の意義やそれに対する評価、法改正を受けた農協の“自主改革”のあり方に関しては、政界、学术界、産業界において様々な立場が入り混じった活発な議論がなされてきた。2019 年にはその移行期間が終了し、いよいよ実践的な取組へと視点が移っていくところである。一方この間、2012 年には「国際協同組合年 (IYC)」として世界各国で、協同組合の取組と役割について実態共有と中長期的な未来を見据えた議論が行われてきた。また、2016 年には国連教育科学文化機関 (UNESCO) によって「協同組合の思想と実践」が無形文化遺産に登録されるなど、「解決すべき悩みや課題を人と人とが助けあい、力を合わせて実現していくしくみ (本書第 3 章)」である協同組合の再評価が進んでいる。

農協改革を巡る主たる論点は、「農家の所得向上」という政府の掲げる大目標のもとにおいて、総合農協としての組織・経営・事業がどう転換され発展の道筋を描けるかであるが、この点を巡る議論の根底には「協同組合とは何か」に対する主体間の理解・認識の隔たりが常に存在し、双方の意見をかみ合わなくさせ、建設的な議論を妨げているように感じる。本書は、こうした背景の中、2009 年～2016 年にかけて掲

載された日本農業新聞のいくつかの連載記事を補筆・編集されて取りまとめられた「協同組合史」書である。過去より紡がれてきた協同組合の「源流」をつぶさに見せることによって、「協同組合とは何か」という命題に対して向き合うきっかけ、ヒントを読者に提供してくれる。農業改革を巡る議論の懸け橋としての役割を担うべき書であるといえるのではないだろうか。

本書の構成は以下である。第 1 章においては、主論として、日本における現代的な協同組合の設立までの歴史について、理想を実現しようとするキーパーソンたちの人生・思想・営みを基軸に、大局的な視点からまとめられている。第 2 章においては、歴史の深い欧州・東アジアの協同組合の起こりと、現在の特徴的な取組・社会において果たしている役割について事例紹介され、第 1 章からの協同組合に対する理解を広げてくれる位置づけとなっている。そして第 3 章においては、協同組合論を専門とする北川氏によって、協同組合の理念や組織的な仕組みが整理され、特に農協について、協同組合であることの意義・特徴や今後の進むべき方向性に関する意見が提示されるという構成となっている。以下、各章の要旨をとりまとめながら、本書の意義と課題について解説を試みたい。

第 1 章は、協同組合の設立を巡る各時代の足跡について、組織体系・関連法律を中心とした視点から、時代ごとに丁寧な整理を行っている。また、単なる説明にとどまらず、それらの「事

実」を取り巻く様々な人物の理想・情熱・思惑を紡いだ「物語」として取りまとめることによって、日本における協同組合の思想的・組織的な原点と成立の過程をドラマチックに分かりやすく理解することが出来る。

本章前半ではまず、「世界初の協同組合」ともみることのできる「先祖株組合」を立ち上げた大原幽学と、「報徳思想」を生み出した二宮尊徳の取組が取り上げられる。また、協同組合の組織的な原型として、明治期の農村部の混乱の中で欧州を参考に設立された「信用組合」「産業組合」について、理想的な組織の設立を目指した人々が積み上げた議論の数々と発展の経緯を取り上げることによって、日本の協同組合の思想的・組織的な原点を明らかにしている。

次に本章後半では、1954年の農協法改正という1つの大きな節目に至るまでの歴史として、戦後期を中心とした今日的な協同組合の設立過程が詳細に説明されている。法律の制定を巡る駆け引きや、理想の実現を目指す先導者たちの発言や行動、やり取りが生き生きと描かれ、相互扶助による困窮者の救済や社会平等の実現を目指した人々の熱意が伝わってくる。本書では、協同組合の基礎として組合員による「自主・自立」を大きなテーマの1つとして掲げ、それによって昨今の国による農協経営への介入を批判する視点を含んでいるが、第1章にみる協同組合史の担い手は、「世の中をよくする」というより純粋で情熱的な思想・目的にこそ、協同組合の根幹であるということを体現している。翻って今日の協同組合を見るに、最も不足している視点はこの理想的目標の揭示とその実現に向けた熱量・行動力ではないだろうか。協同組合として成熟期にある現代において、その取組には閉塞感を感じてしまう。「農家のため」「消費者のため」という本来的な協同の価値を、その事業において真に実現することが出来ているのかと考えさせられる。

次に第2章は、欧州・東アジアの協同組合の

起こりと現在の取組・役割について事例紹介がなされている。多種多様な発展過程や取組について現地調査を踏まえて論じられる本章は、今日的な協同組合の意義とその未来を議論する上での視野を大いに広げてくれる。端的な事実整理と特徴の提示だけでなく、特定の軸を通じた整理によって、日本の実態も含めた比較分析による知見を得ることが出来れば、本書の価値を高めることにつながるだろう。

最後に第3章は、第1章、第2章にて示された協同組合の「源流」を踏まえ、農業を中心にその「未来」を描く役割を担っている。前半部分では、北川氏によって、協同組合の歴史とICA九五年原則やJA綱領等に示される協同組合の「アイデンティティ」が平易な形で噛み砕かれて説明される。それを受け、後半部分では、実践過程にある農協の活動・事業方針を提示しつつ、協同組合の理想的な未来として、その「存在意義」「今日的な役割」を提起している。

本書の学術的な意義、現場での実用性の観点から少々残念に感じるのは、本書において第3章を中心に展開される主張が、一貫して「理想的な協同組合の姿」だけに立脚していることである。本来、より現実的な「未来」を描くためには、現在の協同組合の実態を真摯に受け止めることが何よりも重要といえる。前述のように、協同組合の「源流」との対照によって、協同組合の現在位置はより鮮明に捉えることが出来ることは、「源流」を最大のテーマとして据える本書の重要な意義であり、価値となるはずである。先人の情熱的で豊かな生き様は、理想的な協同組合の姿を再認識させるだけにとどまらず、現在の実態・課題に向き合うヒントを与えてくれるに違いない。本書が示す協同組合の「源流」は、協同組合の「未来」を議論する土壌として、理想と現実の隔たりを、意見の異なる多様な主体間の溝を埋める懸け橋となる可能性を秘めているのではないだろうか。